

声ノマ 全身詩人、吉増剛造展

The Voice Between: The Art and Poetry of Yoshimasu Gozo

「吉増を体験すれば、もつと自由になれる。」

本展は日本を代表する詩人、吉増剛造（1939-）の約50年におよぶ止まらぬ創作活動を美術館で紹介する意欲的な試みです。ドローイング作品（生原稿）のほか、映像、写真、オブジェ、録音した自らの声など様々な作品や資料を一挙公開します。パフォーマンス、映画上映などイベントも多く開催する本展は、「詩人」の枠を飛び越えた、吉増ならではの多様性あふれる形態で、聴覚・触覚をも刺激する、体感する展覧会です。「言葉」の持つ力、豊かさを体験してください。



左：〈怪物君〉を制作する吉増剛造 2015年 右：サヌカイトを口にくわえる吉増剛造 2015年 Photo: Kioku Keizo

会期 2016年6月7日〔火〕 - 8月7日〔日〕

会場 東京国立近代美術館 1階企画展ギャラリー

本展のポイント

- 77歳の現在も止まらず変化し続ける、日本を代表する詩人のひとり吉増剛造（1939-）、その約50年におよぶどん欲な創作活動を、美術館で紹介する意欲的な展覧会。
- 「詩人」に収まらない吉増ならではの多様性あふれる展示。東日本大震災以降書き続けられている〈怪物君〉と題されたドローイングのような自筆原稿数百枚のほか、映像、写真、オブジェなど多岐にわたる作品を一挙公開。
- 大友良英（音楽家）とのコラボレーションによるパフォーマンス、ジョナス・メカス（映画監督）作品上映など、多彩なイベントも多数開催。
- 鑑賞型の従来の展覧会とは異なり、聴覚・触覚をも刺激する、体感する展覧会。
- 2016年は「詩」が注目。インターネットの普及などでコミュニケーションの形が変わっていく今だからこそ、「言葉」の持つ力が注目され、吉増に関する刊行物も、いくつも出版が予定されています。

開催の趣旨

■ 「声ノマ」とは

詩人である吉増は、しばしば漢字をカタカナ（音）に置き換えることで、言葉（声）が本来もっていた多義性を回復させます。

展覧会タイトルとなっている「声ノマ」の「マ」には、魔、間、真、目、待、蒔、磨、交、舞、摩、増など様々な意味が込められています。



《わたしたちはだれもが優れた楽器なのだ》制作年不詳 ©Gozo Yoshimasu

■ 今なぜ吉増剛造を、美術館で取り上げるのか？

「声」と「音」にこだわり、旅をし、朗読パフォーマンスなど身体性を伴う創作活動にも重きを置いてきた吉増。その机上での詩の創作に留まらない「言葉」へのアプローチや、ザラリとした触感あふれる作品群は、インターネットの普及で画面上の言葉のやり取りが日常になった私たちに、言葉との向き合い方、ひいては他者との関わり方をも問いかけます。また吉増は、自らの身体をもって詩の世界を拡張し続けてきたゆえに、その作品は映像、写真、オブジェ、パフォーマンスなど、通常詩人が発表する「詩集」という印刷物のみでは伝えきれない形態に広がっています。吉増の創作活動の全容を、どうぞ会場で味わってください。

■ 世代・ジャンルを超えた、ミックスカルチャー的な側面

本展の特徴として、ミックスカルチャー的な側面もあげられます。朗読を伴うパフォーマンスを行い、近年では大友良英、鮎屋法水などとのコラボレーションも盛んな吉増。詩という枠組みを感じさせない、吉増の変化拡張し続ける創作活動は、世代やジャンルを超えてさまざまな「人」を魅了し、引きこんでいます。

* 本展カタログ寄稿（予定）：朝吹真理子（作家）、佐々木中（作家・哲学者）、ホンマタカシ（写真家）など

* 音とのコラボレーション：大友良英（音楽家）、空間現代（スリーピースバンド）

* インスタレーション：鮎屋法水（演出家・美術家） * 映画上映：ジョナス・メカス 作品など

* 吉増とゆかりあるゲストを迎えてのトークも開催

* 内容等は変更される場合があります。

■ 今年は「詩の年」でもある！

2016 年はビート文学の代表者のひとり、詩人アレン・ギンズバーグ生誕 90 年にもあたり、詩にまつわるイベント、刊行物の出版などが例年になく豊富な「詩」の年でもあります。吉増に関しても今年、『我が詩的自伝 素手で焔をつかみとれ』（講談社現代新書）、長編詩『怪物君』（みすず書房）、『GOZO ノート』全3巻（慶応義塾大学出版会）などいくつもの著作が出版予定です。また秋には、詩の世界では最も重要な出版社のひとつである New Directions から詩集『Alice Iris Red Horse: Selected Poems of Yoshimasu Gozo』が出版されます。

■ 全身詩人、吉増自身の魅力

ノイズミュージックの生演奏とともにパフォーマンスする吉増は、シャーマンのようだとも言われ、イタコの「口寄せ」や「パンク」といった言葉も彷彿とさせます。子どものようにペロっと舌を出すのが大好きな吉増。2013年に文化功労者、2015年には日本芸術院賞・恩賜賞受賞者となった吉増。多面的な魅力は、作品や創作活動だけではなく、吉増剛造本人にもあてはまります。

展覧会の構成

■ 会場に入ると、声や音を空間にあふれさせるため、壁をなるべく立てず、布でゆるく仕切った7つの部屋が広がります。布のセレクトにはテキスタイル・デザイナー安東陽子が関わっています。

奥には、鮎屋法水とのインスタレーション空間と、パフォーマンスや映像をみせるシアタースペース。計9つのタイプの異なる空間で構成します。

1. 日記 [note]… 22歳の頃から2011年まで

吉増は日記魔でもあります。この展覧会では、1961年、つまり詩人としてデビューする前の22歳の頃から2011年までの日記を公開します。詩のメモや、まるで水彩のような色使いがされたスケジュール表など、吉増ならではの日記帳です。



〈日記〉より 1961-64年
Photo: Kioku Keizo

2. 写真 [photo]… 多重露光写真を中心に

1994年(55歳)頃から制作開始された、多重露光写真を中心に展示します。ちなみに吉増が撮影を始めたのは、10歳で中古のミノルタカメラを買ってもらったでした。

3. 銅板・銅巻 [copper]… 詩を銅板に打刻したもの

故・若林奮(彫刻家)が送る銅板に文字を打刻した、オブジェのような作品を展示します。1989年(50歳)に始まったこの作品形態は、さらに発展して、長さ5メートルにもなる「銅巻」ともなりました。

4. 声ノート [voice note]… 録音した自らの声

日常や旅先など、吉増が30代からライフワークとして、あらゆる場面で録音した自らの声のカセットテープは数百本におよびます。それらアーカイブから選りすぐった「声」を、各々が自由に聞くことができる空間です。他の詩人の朗読などを含むと、千本を超えるテープのコレクションも展示します。



《沖縄の炭鉱夫さん》制作年不詳
Photo: Kioku Keizo ©Gozo Yoshimasu

5. 原稿・メモ [autograph]… 吉増に影響を与えた3人の原稿

びっしりと書かれた吉増の原稿とともに、1977年(38歳)頃から交流が始まった親友、中上健次(作家)の集計用紙に書かれた原稿、自分で野線を引いて書いた吉本隆明(評論家)の詩の原稿、龍安寺の石庭にインスピレーションを得たジョン・ケージ(作曲家)のドローイングなど、吉増が影響を受けた3人の原稿を紹介します。

6. 映像 [gozoCiné]… 無編集吉増版ロードムービー

2006年(67歳)に誕生した、無編集を基本とする吉増版ロードムービーは、「gozoCiné」(ゴゾーシネ)と命名され、今日に至るまで吉増のライフワークのひとつに加わります。厳選した約10本をスクリーニングします。

7. 怪物君 [drawing]… 自筆生原稿

2012年(73歳)、東日本大震災の後から書き続けられた長編詩〈怪物君〉のための、数百枚におよぶ自筆生原稿を紹介します。一般的な詩の生原稿を大きく逸脱した、ドローイングとも、水彩とも、コラージュとも、パフォーマンスの結果とも呼べる、触感あふれる原稿です。



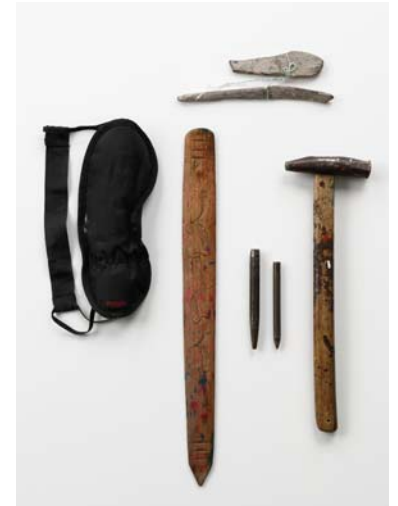
〈声ノート〉より「父の死」1987-88年
Photo: Kioku Keizo

8. インスタレーション空間 [installation]

吉増の声や文字をモチーフにした、鮎屋法水（2014年『ブルーシート』で第58回岸田國土戯曲賞受賞）によるインスタレーションを展示します。

9. シアタースペース [theater]

吉増が釧路で行った舞踏家の大野一雄とのパフォーマンスを映像で紹介するほか、「音とのコラボレーション」として大友良英、空間現代と吉増がパフォーマンスを行うなど、身体性の高い創作活動を体験するためのスペースです。



パフォーマンスのための道具（サヌカイト、ハンマー、鑿、イクバスイ、アイマスク） Photo: Kioku Keizo

イベント

■ 一度限りの生のライブ体験を、ひとりでも多くの人と共有できるよう、イベントをできる限りもうけています。
*内容等は変更される場合がありますので、最新情報は当館公式ホームページ (<http://www.momat.go.jp>) をご覧下さい。

1. 対談 … 地下1階講堂 *要観覧券、要整理券 (定員 140名)

- ・6月11日(土) 14:00-16:00 今福龍太(文化人類学者・批評家)+ 吉増剛造
- ・8月6日(土) 14:00-16:00 佐々木中(作家・哲学者)+ 吉増剛造

2. 音とのコラボレーション … 1階企画展ギャラリー *要観覧券、要整理券 (定員 100名)

展示会場内のシアタースペースにて、3日間限定。ミュージシャンと吉増のパフォーマンス。

- ・6月17日(金) 18:00-18:45 空間現代 + 吉増剛造
- ・6月18日(土) 14:00-14:45 空間現代 + 吉増剛造
- ・大友良英 + 吉増剛造 *日時調整中

3. 映画上映 … 地下1階講堂 *要観覧券、要整理券 (定員 140名)

25年来の親交が続くジョナス・メカスの作品上映会として、映画「リトアニアへの旅の追憶」(日本語字幕、16ミリフィルム)を上映。DVD化されていない作品のため、非常に貴重な機会です。

- ・吉増剛造によるアフタートークあり *日時調整中

伊藤憲監督、吉増主演の映画「島ノ唄」

- ・伊藤憲、吉増剛造によるアフタートークあり *日時調整中

4. ギャラリートーク … 1階企画展ギャラリー *申込不要、要観覧券

保坂健二郎(当館主任研究員・本展企画者)によるギャラリートークを、会期中の2か月、通常の展覧会より回数多く開催予定。吉増が飛び入り参加する可能性もあり。

- ・6月10日(金) 18:30-19:30
- ・7月1日(金) 18:30-19:30

*以降、日時調整中



朗読パフォーマンスをする吉増剛造
Photo: Sayuri Okamoto



空間現代 Photo: Maezawa Hideto

略年譜

- 1939 (昭和14)年 0歳 2月22日、東京都杉並区阿佐ヶ谷に生まれる。「剛造」は強い名前を求めた父が名付けたもの。
- 1945 (昭和20)年 6歳 父の故郷の和歌山県に疎開。敗戦後、福生第一国民学校に転校。
- 1949 (昭和24)年 10歳 夏、洗礼を受ける。中古のカメラを買ってもらい撮影を始める。
- 1957 (昭和32)年 18歳 慶應義塾大学に入学。詩作を始めクラス雑誌に載せる。
- 1963 (昭和38)年 24歳 大学を卒業。卒業論文のタイトルは「芭蕉の詩精神」。
- 1964 (昭和39)年 25歳 初の詩集『出発』(新芸術社)を出版。
- 1967 (昭和42)年 28歳 『文藝』6月号に長篇詩「疾走詩篇」を書き下ろす。現代詩の世界の新しい寵児のひとりとなる。
- 1972 (昭和47)年 33歳 詩の朗読でジャズミュージシャンと共演する機会が増える。
- 1975 (昭和50)年 36歳 月刊『ジャズランド』連載の「太陽の川」に自ら撮った写真を使用する。
- 1977 (昭和52)年 38歳 中上健次との交流が深まる。またこの頃から詩行のなかに「、」(読点)が頻出する。
- 1978 (昭和53)年 39歳 夏に恐山への旅。「いたこ」の間山タカを訪ねる。以後数年間、毎夏に訪ねる。
- 1985 (昭和60)年 46歳 ニューヨーク詩人会議に招待されて谷川俊太郎や高橋睦郎らと渡米、ニューヨークの各所で朗読会。
- 1989 (平成元)年 50歳 この頃から若林奮が送る銅板に文字を打刻するという作業が始まる。
- 1991 (平成3)年 52歳 ジョナス・メカスに会いにニューヨークへ。本物の詩人を感じる。
サンパウロ・ビエンナーレに写真と銅板オブジェを出品。
- 1994 (平成6)年 55歳 夕張の廃坑前で偶然多重露光映像を撮影。後の写真作品の方法論となる。
- 1998 (平成10)年 59歳 9月、斎藤記念川口現代美術館で「水邊の言語オブジェ 吉増剛造—詩とオブジェと写真」を開催。
- 2001 (平成13)年 62歳 フランスの代表的な詩誌『PO & SIE』が吉増を特集する。
- 2003 (平成15)年 64歳 9月、ニューヨークのオルタナティブスペース、ロケーション・ワンでワークショップと展覧会。
- 2006 (平成18)年 67歳 初めてのビデオ作品「まいまいず井戸」を撮影。
無編集を基本とする吉増版ロードムービーは、後に「gozoCiné」と命名される。
- 2011 (平成23)年 72歳 ポレポレ東中野にて「gozoCiné」全52作品を一挙上映。
トークゲストに吉田喜重、ホンマタカシ、小林康夫、萩原朔美、朝吹真理子ら。
- 2012 (平成24)年 73歳 『朝日新聞』(電子版)の「3・11後の詩」特集でインタビューを受けたのをきっかけに、「詩の傍らで」と題して詩作が始まる。後の〈怪物君〉に発展。
また大友良英、鈴木昭男とともに、アメリカ・カナダ巡回公演に参加、各地でセッションを行なう。
- 2013 (平成25)年 74歳 ロンドンの大和日英基金にて「Gozo Yoshimasu: As Though Tattooing on My Mind」展を開催。
- 2015 (平成27)年 76歳 日本芸術院より芸術院賞と恩賜賞を受ける。日本芸術院会員に選出される。
- 2016 (平成28)年 77歳 秋、アメリカの重要な出版社のひとつである New Directions から『Alice Iris Red Horse: Selected Poems of Yoshimasu Gozo』が出版予定



ポートレート(吉増剛造)2009年
撮影:ホンマタカシ ©Takashi Homma

開催概要

タイトル (日) (英)	声ノマ 全身詩人、吉増剛造展 The Voice Between: The Art and Poetry of Yoshimasu Gozo
読み方	こえのま ぜんしんしじん、よしますごうぞうてん
会期	2016年6月7日 [火] - 8月7日 [日]
会場	東京国立近代美術館 1階 企画展ギャラリー 〒102-8322 東京都千代田区北の丸公園 3-1
主催	東京国立近代美術館
開館時間	10:00 - 17:00 (金曜は 20:00 まで) 入館は閉館の30分前まで
休館日	月曜日 (7/18 は開館)、7/19 [火]
アクセス	東京メトロ東西線「竹橋駅」1b 出口より 徒歩 3分
観覧料	一般 1,000 (800) 円、大学生 500 (400) 円 * () 内は 20 名以上の団体料金。いずれも消費税込 * 高校生以下および 18 歳未満、障害者手帳をご提示の方とその付添者 (1 名) は無料 * 本展の観覧料で入館当日に限り、同時開催の「奈良美智がえらぶ MOMAT コレクション 近代風景 ～人と景色、そのまにまに～」(2F ギャラリー 4)、所蔵作品展「MOMAT コレクション」(4F-2F) もご覧いただけます。 * 使用済み入場券で、入館当日に限り再入場が可能です。
リピーター割引	本展使用済み入場券をお持ちいただくと、2 回目以降は特別料金 (一般 430 円、大学生 130 円) でご覧いただけます。
お問い合わせ	03-5777-8600 (ハローダイヤル)
ホームページ	http://www.momat.go.jp
同時開催	2016年5月24日 [火] - 11月13日 [日] 「奈良美智がえらぶ MOMAT コレクション 近代風景 ～人と景色、そのまにまに～」(2F ギャラリー 4) * 8/8-8/15 の休館をはさみ、5/24-8/7、8/16-11/13 の 2 会期で、展示内容は変わりません。 2016年5月24日 [火] - 8月7日 [日] 所蔵作品展「MOMAT コレクション」(4F-2F) * 観覧料：一般 430 (220) 円、大学生 130 (70) 円 * 高校生以下および 18 歳未満、65 歳以上、障害者手帳をご提示の方とその付添者 (1 名) は無料 * () 内は 20 名以上の団体料金。いずれも消費税込

【報道関係お問い合わせ先】

広報担当：紀太(きだ)みどり、三輪紘子 内容：保坂健二朗
tel：03-3214-2564 fax：03-3214-2576 e-mail：pr@momat.go.jp

広報用貸出画像一覧

※以下の画像は全て貸出可能です。

貸出ご希望の場合は画像番号をお知らせくださるか、別紙申込書をご利用ください。
画像掲載の際は、画像貸出時にお送りしますキャプションをご記載ください。



① 《怪物君》を制作する吉増剛造
2015年 Photo: Kioku Keizo



② サヌカイトを口にくわえる吉増剛造
2015年 Photo: Kioku Keizo



③ 《わたしたちはだれもが優れた楽器なのだ》制作年不詳 ©Gojo Yoshimasu



④ 《日記》より 1961-64年
Photo: Kioku Keizo



⑤ 《怪物君》を制作する吉増剛造 2015年 Photo: Kioku Keizo



⑥ 《怪物君》より 2014年
Photo: Kioku Keizo ©Gojo Yoshimasu



⑦ 《裸のメモ》より(部分) 2013年
©Gojo Yoshimasu



⑧ 《沖縄の炭鋏夫さん》制作年
不詳 Photo: Kioku Keizo
©Gojo Yoshimasu



⑨ 《声ノート》より「父の死」1987-88年
Photo: Kioku Keizo



⑩ パフォーマンスのための道具
(サヌカイト、ハンマー、鑿、イク
パスイ、アイマスク)
Photo: Kioku Keizo



⑪ 空間現代 Photo: Maezawa Hideto



⑫ ポートレイト(吉増剛造) 2009年
撮影: ホンマタカシ ©Takashi Homma



⑬ 朗読パフォーマンスをする吉増剛造
Photo: Sayuri Okamoto